

急性中耳炎検出菌の季節的推移

杉田 麟也・河村 正三・市川 銀一郎
藤 卷 豊*・出口 浩一**

目的：一般病院における急性中耳炎検出菌の傾向とその季節的な特徴を検討した。

対象：1979年7月から1980年6月末日まで東京都江東区医療法人江東病院耳鼻科を受診した急性中耳炎患者586名である。

方法：初診時に鼓膜切開または外耳道に流出していた耳漏を滅菌綿棒で採取した。検体はTCSプロス滅菌試験管に入れ保管し、当日、東京総合臨床検査センターで細菌検査を実施した。

結果：①鼓膜切開406例、425株であった。検出率が高いのは肺炎球菌50%、インフルエンザ菌32%、溶連菌7.5%、黄色ブドウ菌6%、緑膿菌2%などであった。②耳漏は168例、221株であり、肺炎球菌26.2%、インフルエンザ菌24%、溶連菌14%、黄色ブドウ菌21.3%、緑膿菌7.0%などであった。③検出菌を季節的に検討した。肺炎球菌は春、インフルエンザ菌は冬に、緑膿菌は夏に検出されやすく、いずれも統計的に有意差を確認した。

考察：検体の採取方法により、菌検出率に大きな差がみられた。肺炎球菌、インフルエンザ菌は鼓膜切開例に多く、黄色ブドウ菌、緑膿菌は耳漏症例に多く検出さ

れた。

インフルエンザ菌が冬に多いのは“風邪”の流行との関係が考えられた。また、緑膿菌が夏に多いのは水泳や発汗の影響があると考えた。

質 疑 応 答

岩沢（札幌通信）①混合感染はどの程度か。

②上気道感染症を含めての併発症の割合はどうか。

杉田（順天堂大）1)混合感染は7%でみられた。2種5.8%、3種1.2%、4種0.3%であった。

2)患者の多くは“風邪”をひいたという病歴を有していた。鼻内所見は膿性鼻汁や後鼻漏を呈する者が多かった。中耳腔と上咽頭の菌を比較すると大部分の症例で検出菌が一致した。

佐藤（金沢医大）①滲出性中耳炎は除外されていますか？念のため。

②7～8月に緑膿菌が多くなることについてのコメントを。

杉田 1)滲出性中耳炎はふくまれていない。

2)緑膿菌は夏にみられ、水泳後に中耳炎を発症した症例が多かった。

過去10年間の慢性中耳炎検出菌について

福田 正弘・河村 正三・市川 銀一郎
杉田 麟也・田中 幹雄・後藤 重雄
藤 卷 豊・大谷 美弥子†

順大付属病院耳鼻科外来患者を対象に、過去10年間の慢性中耳炎症例からの検出菌について、その変化がないかどうか検討した。

細菌培養は、順大中検で行い、全例好気および嫌気培養を実施した。

結果は以下のごとくであった。

* 順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学教室

** 東京総合臨床検査センター

† 順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学教室

1. 1970年から1979年までの10年間に、1244例から40菌種、2315株の細菌を分離同定した。

単独感染と混合感染の比率は55%を混合感染が占めた。

2. この10年間で、慢性中耳炎検出菌に、特に大きな変化は見られず、Staphylococcus (以後S.) aureus, Pseudomonas, aeruginosa が主で、以下Corynebacterium, S. epidermidis, Proteus mirabilis, Proteus inconstans の順であった。

3. 単独感染と混合感染を比較してみると、単独感染では、S. aureus, P. aeruginosa が主で、S. epidermidis, Corynebacterium, Proteus 属は検出率が低く、混合感染でのS. epidermidis, Corynebacterium, Proteus 属の検出率が著明に多かった。

4. 1970年～1974年までをI期、1975年～1979年までをII期として分類すると、両期を比べて検出率で特に大きな変化を示したものは無いが、II期での

Proteus 属の検出率の増加が目される。

5. その他、I期、II期を比べて増加してきたものには Serratia などの腸内細菌、Achromobacter などの非発酵性グラム陰性桿菌などがある。

6. 嫌気性菌は、I期と比べるとII期が約6倍の検出率を示し、また、術後再発例、上鼓室化膿症、中心性穿孔の順で検出されやすかった。

質疑応答

杉田(順天堂大) われわれも多剤耐性症例を経験したが、特徴は以下のごとくである。

① ペニシリンナーゼ抵抗性PC、セファロsporin系、GM などアミノ配糖体系に耐性でDOXY, MINOのみ感性であった。

② このような症例は、中耳炎術後再発例で、術後感染予防に、セファロsporin+AMKを使用していた(追加)。

過去10年間の慢性中耳炎検出菌の 薬剤感受性の変化について

大谷 美弥子 ・ 河村 正三 ・ 市川 銀一郎
杉田 麟也 ・ 田中 幹夫 ・ 後藤 重雄
藤巻 豊 ・ 福田 正弘*

各抗生物質に対する慢性中耳炎検出菌の薬剤感受性の変化について10年間の成績をまとめた。

症例は順天堂大学附属病院における外来患者1244例、2315株である。薬剤感受性検査は3濃度ディスク法を用い、感受性成績の卍および卍を感性とし感性率を求めた。

結果は以下のごとくであった。

① 1970～1979年の間に著しい耐性化のみられた菌はS. aureus とP. inconstans である。

② S. aureus とS. epidermidis はPCG, AB PC に対する耐性株が増加している。

③ P. inconstans はABPC, セファロsporin

系, GM などアミノ配糖体に対して著しく耐性株が増加している。最近Proteus の検出率が増加していることとあわせて考えると今後特に慢性中耳炎では治療上やつかいな菌になることと思われる。

④ S. aureus, P. aeruginosa の最近分離した株のSBPC, CEZ, CFS, GM に対するMICを報告した。

質疑応答

馬場(名市大) セファロsporin系ではCERがS. aureus に現在でも最もよい抗菌力を示すとされている。S. aureus に対するセファロsporinの感

* 順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学教室